

特別例会「一枚のハガキ」

新藤兼人監督追悼上映会、会員以外の人も入場できます

特別例会のお知らせ

■名称／第 61 回例会、特別例会・上映会

『一枚のハガキ』

■日時／7月18日(水)①PM10:30～、②PM2:00～、
③PM4:20～、④PM6:40～

■場所／加古川総合文化センター大会議室(JR 東加古川駅から北へ徒歩 10 分、車は加古川バイパス加古川東ランプ北へすぐ)

■会員の受付／入会手続きが終わっている方は、受付に同封の「例会参加券」をお渡しください。

入会手続きを行っていない方は、受付で 4 箇月分の会費(2000 円)を支払い、入会手続きを終えてから、「例会参加券」をお受取りください。

■会員以外の受付／当日入場料 1,300 円、チラシ割引入場料 1,200 円、加古川シネマクラブ会員の同伴者入場料 1,000 円を支払って入場ください。

【例会作品データ】

■タイトル／一枚のハガキ

■監督／新藤兼人

■出演／豊川悦司、大竹しのぶ、六平直政、大杉漣、柄本明、倍賞美津子、津川雅彦、川上麻衣子、絵沢萌子、大地泰仁、渡辺大、磨赤兒

■データ／2010 年、日本、114 分、ドラマ／ヒューマン

■作品介绍／2012 年 5 月 29 日に 100 歳で亡くなった新藤兼人監督が、「映画人生最後の作品」との思いを込めて撮り上げた感動の反戦映画。32 歳で招集され、同じ部隊の兵士 100 人のうち、終戦を迎えたのはたった 6 人のみという監督自身の過酷な戦争体験を基に、一枚のハガキが巡り合わせた一組の男女の運命を通して、戦争の不条理と、それに巻き込まれた人々の無念と再生への道のりを、ユーモアを交え力強く描き出していく。

人の命が「クジ」に左右され、兵士の死は残された家族のその後の人生を破滅に導く。そんな戦争の愚かしさを、監督は、体験者ならではの目線で、時に激しく、時に笑い飛ばすように描いてみせた。

戦争末期、中年兵として徴兵された男は、仲間の兵士から一枚のハガキを託される。そこには「今日はおまつりですがあなたがいらっしやらないので、何の風情もありません。友子」とだけ記されてあった。終戦後、そのハガキの送り主である兵士の妻を訪ねると、そこには夫の亡き後、たて続けに家族を失い、古家屋とともに朽ち果てようとしていた女の姿があった。

新藤兼人監督追悼

『一枚のハガキ』の特別例会や全国映連映画大学 in 明石の準備が進んでいた 5 月の終わり、29 日に新藤兼人監督が亡くなったというニュースが流れた。百歳の現役映画監督が逝ったという出来事は、意外に大きな報道としてとりあげられた。日本映画を支えてきた大きな柱の 1 本が無くなったという空虚な気持ちになった人も多かった。居なくなったことで、その存在が大きかったことあらためて知ることになったのである。

貧しく活気があった昭和初期、死に直面した戦地での戦争体験、映画制作が活況を呈した時代、独立して作った映画会社の破産危機。新藤兼人の人生は、昭和という時代と日本映画そのものである。その中でも、晩年は、自らも体験してきた太平洋戦争の戦時下と戦後におけるふつうの家族の暮らしを表現してきた。

映画とは何か。芸術、娯楽、記録……。あらた



めて、新藤兼人の作品を観てみると、自らが伝えたいことをテーマに表現していることがよくわかる。つまり自己表現なのだが、その中には使命感のようなものがある。そのような、晩年になってそのことは強くなる。平穏な生活を望むふつうに暮らす家族が、戦争など為政者の都合で大きく人生が変わってしまうという不条理に対する訴えがあるようだ。『一枚のハガキ』は昭和の映画人である新藤兼人渾身の反戦映画なのだ。(ハインリッヒ)

『東京家族』(山田洋次監督)撮影現場見学記



(in 広島県大崎上島、5月17日)
写真は現場の山田洋次監督

晴天に恵まれ朝8時半、乗用車一台に見学メンバー4人は、加古川から一路、瀬戸内海に浮かぶ大崎上島へと出発し、お昼には無事到着しました。案内してくださる松竹宣伝部の方から、島へ到着後まもなくして連絡が入り、トントントン拍子で海辺近くの小高い山(?)での撮影現場へと向かいました。

さて、私にとっては初めての撮影現場。撮影シーンは出演の少女と犬の散歩。セリフは「こんにちは」。落ち着いた感漂う山田洋次監督。老若男女のスタッフ20数名ほど。けっこう間近で見学させていただいたのですが、瀬戸内が穏やかなせいなのか、撮影が順調なためなのか、罵声がどこからも飛び交うことなくカット。そして、海釣りのシーンを撮るために海岸へ移動。ここでは、撮影の合間に、私たちは山田監督のお話を聞くことが出来、なんと直々に近くの古い町並み(昔の女郎屋)が残っている路地まで、歩いて案内してくださいました!!

そして、最後には一緒に記念写真も快く撮っていただき、大感激大満足の撮影見学となりました。

午後からざっと約2時間の見学を終え、帰りに島の旅館清風館(スタッフが宿泊している)にて、松竹の宣伝部の方とお茶(ご当地名産はブルーベリージュース)をし、御礼を述べてお別れとなりました。帰路も順調で、写真をたくさん撮ってくださった山本(芳)さん、行きも帰りも運転してくださった岡本さん、ありがとうございました。(せん)

「映画大学 in あかし」のご案内

7月27日(金)・28日(土)・29日(日)に、明石の商工

会議所ホールで**全国映連第41回映画大学**が開催されます。1971年から映画・文化を学ぶセミナーとして始まったもので、映画監督をはじめ映画に携わる人や専門家を講師に招いて各地で開かれ、全国の人が集まってきました。今年、明石で開催することになり、加古川シネマクラブは、明石シネマクラブとともに、地元団体として現地事務局として協力しています。詳しくは資料で確認いただき、参加いただきますようご案内いたします。

前回例会の報告

5月23日の例会では、ポーランド映画の『木洩れ日の家で』を鑑賞しました。夫が他界し、息子が巣立った、古い屋敷に愛犬と住む老女アニュラ。彼女の日常と、さほど長くはない自らの余生を考える姿を淡々と描いた作品で、一見、単調なモノクローム映像でしたが、アニュラの誇りと気品を垣間見られ、多くの年配の女性から共感を受けたようでした。

アンケートで、「いずれ行く道・・・」3件という意見があり、主人公をわが身に置きかえて人生の最後を考える人も多かったようです。また、最後の決断と満ち足りた最期に共感した意見もいくつかありました。参加者数131人、最近では少し多かった。

運営状況

赤字のときは、例会選定の会話の中でフィルム代が重要なことでした。赤字でなくなる(決して黒字でもありません、かなり節約と臨時収入があって赤字にならなかっただけです)と、フィルム代が高くなければよいということで、選択肢が増え、作品選定でも作品内容の会話が弾みます。

会員が、あと20人増えれば、さしあたって運営面での心配がなくなります。会員の皆さんには、引き続き、この会のことをクチコミで宣伝いただきますようお願いいたします。(事務委員、宮本)

ご意見をお待ちしています

映画の感想や意見など、このニュースへ記事をお寄せください。200~300字程度にまとめていただければ助かります。おすすめ作品をファックス、メールや例会会場のアンケート用紙でお知らせください。

加古川シネマクラブ 〒675-0101

加古川市平岡町新在家 752-46 B-313 山本方

TEL 090-9283-0435 FAX 078-935-8528

E-MAIL cinemaclub@nifty.com

<http://homepage3.nifty.com/cinemaclub>

会員数 180人(5月23日現在)